



近世說美少年錄

五編  
五

~ 13  
3567  
25





門 13  
號 3567  
卷 25

新編玉石童子訓卷之五下冊

第四十回

登時

今此ら何と欲隠え俺上の箇様々々如此々々の事ありとて言言詳小説示  
まよ朱之成も宿六も耳と敬けてうら所原這個辛踏无四郎寧成の父ハ  
辛踏真蒼と喚做して陸奥國信夫の郡信夫の郷多醫くま生るる然世  
る方術ある不あらねど家傳の田圃十餘町あり是より其家置かからる彼  
身ハ半農半醫いをありける程本妻うまを生ぜず獨子无四郎が年七八歳を  
けは夏あつの時候妻へ時疫とを身故りける人の家婦人つを離れ持もた

早稲田 大學 図書館  
34.6.3 災  
藏 書



況十歳も足らぬ稚子と父親の身單りと子養へたふれは、真茶弁の已と必  
 後妻と取女とを一家兒と任用せける程、无四郎が稍成長隨の生さぬ中とて母も  
 慈愛を添子も亦孝順を盡せしが、口舌起りと四隣と鬨まるては、  
 けれも、真茶弁是と制し、るむ肚裏の思ふや、右中左の无四郎と這地方に在ら  
 せ、俺家一日も安らざるを、姑且彼身と遠離て、又其術もあらんとて、无四郎  
 然り氣を、京師へ登りて遊學せんとて、路費程と取らざるを、舊縁ありける日  
 野西殿へ消息とたてまつりて、其子の上と進言せしめ、然り无四郎寧成の継母の  
 言と最朽惜く思へとも、威勢辞ふとて、遂に京師へ赴きて、日野西中納言  
 頭卿の扈從と多し、雜掌の如く、そのあけける事の光景の第一集二集不見え、  
 介后又年と履して、无四郎が継母陸奥の身故り、とぞえ、今這時、父真茶弁の  
 歳七旬の翁のあはると、萬事成就て不便あはらば、親无四郎の消息と、世

故郷へ還りて、俺と資助よとあり、郵書京師へ届け来し、无四郎精地は、  
 びと、兼頭卿の京示と、奥へ退くと、ある程、漫阿夏の色、惑ふて尚、総角  
 る珠之、双と君家、留め在らざる、事の樹と、誘果と、阿夏と、俱と、陸奥の  
 信夫の御へ、還り免ける、その願、未の、又是第二集、小説次、今、あら、  
 毛然程、辛踏、无四郎の、當時、逆旅の、日教、歴て、舊里、信夫、近づく程、  
 事ある、不掛と、親の、允さる、妻と、し、京師へ、取女り、と、親も、所親も、告  
 ら、見へ、今、め、不直、くも、る、所、為、い、ふ、ま、ま、と、思、難、て、家、小、還、着、ぬ、日、其、夜、阿  
 夏、どの、客、店、に、留、在、ら、せ、て、无四郎、一箇、信夫、の、家、へ、還、來、て、ゆ、く、是、と、前、の、父、息  
 茶、へ、老、病、既、身、小、逼、り、て、鍼、灸、藥、餌、の、驗、る、命、危、折、り、けれ、所、親、へ、  
 る、疎、ら、ぬ、御、當、相、款、ひ、て、有、来、事、と、云、云、と、告、て、病、床、へ、伴、ひ、る、と、ま、真、茶、  
 類、中、の、の、公、と、の、不、便、な、れ、と、も、今、无四郎、が、還、り、來、ぬ、け、る、と、見、て、喜、び、の、涙、林、  
 玉石童子訓 卷五下



え。枕方ふはらせて霜の朝の鳴く虫よりも哀しく聲を絞出して後ののよと云と  
いふまはれと舌強りて一言半句も安定ならね執うと聞取る死應のよと云と  
なる元四郎是の便宜と云て當晚阿夏と里積盡処の客店より召取りて親  
も亦所親も説く。俺身京師に在りて時兼頭御給事と女房と這回  
別ふ妻おせよと賜りて己と云て將て還りて誠しやと告知するを真  
蒼の口よりいふその事好す訂まぐもあつた所親も不の字をいふ由  
く皆面出ると祝けり是より続ふ一日を経て息女昇竟身故りけと送  
葬の事佛事追薦都て元四郎が隨意せざるの事。家父奴婢三四各あり  
家傳の田圃十餘町あり況貯録の金思ふよりも少く元四郎都て受納  
あつ是りの後月額と利を總髪と飲頭願ふ做濟し其心願の日より  
親の名を紹て辛踏息女と自稱する醫者も家業を承るの事異言師不

在り程彼身名醫不負及して学術のふあられぬ是の親も及ねども地  
方久しに醫生を療治せし者絶せしと云三松と歴々の阿夏は腹の  
子の出来ね元四郎の息女に猶飽心心地と養子共やと思程辛踏の家は  
舊縁の如く我八と寒民あり夫婦うち續て世を去る跡廿年七八歳  
獨女兒の如く憑りて親族をば件の子の親似我八の店保人某甲の家  
とも其保人も最貧乏者なり憐む下件の女兒は娼妓を售れんと人の噂  
知たる真蒼是と不便と思ひてどうも其保人許りて件の孤女と目  
添て髪を膏脂を塗る形貌を靈れ其眉目も勝れ成長る後々  
傾國の本色をばと云ふと思ひ捨た心あり馳て保人甘甲の舊縁を告げ  
商量して養女の一談赦さし俗の親不知の約束を保人甘甲の手断金  
程よく取らせ後の為の證書を取送り其百件の女兒を將て宿所を還る事



云云と阿夏も其告知らざる阿夏も教ひ爲慈と湯浴を結髪をせ猛  
可小新衣裳を製しと被せざる是も其名を改て晚稻と呼て其習を  
歌舞何れも遊藝への習する其費官分にあらず又後の真茶弁其本  
性親似を酷く酒を嗜む故に客を愛しく家業の急り専外物と飾る故に敗  
死を悪と費と厭ふ世の常言似たる者の夫婦といふ阿夏も是歌妓を  
浮るのふと取買るる人の妻のよく内を政ちて薪炊の損益心を用る性  
良人と其酒を食好とせざる日もある有る上も衣裳を欲して流石と昔  
とあれも其将人の縫せ糸針とふたの取らば然する所要する折も良人と其  
夜と深し良人と其朝寝して猶暇も随の首見晚稻も教ぬ折も糸茶琴を  
鳴し三弦を弾て身の勤まとの餘は朝糸彼身は化粧結髪時の移るを  
知らざりける夫婦かゝの如くも五七年を送る程は所帯と驕奢のふ使減しく

親の禪り田圃を質曲とせしむる歳は借財のまれも真茶弁人と成り素  
よる浮薄の性も既に人々くきて東西の財主の債りと物も思ふ這時件の  
螟蛉女晚稻の年五まで鄙小稀る美女を其媒妁として娘縁を欲する者夏  
ければも真茶弁敢兼引を我女兒に數萬貫を四守城主あつるむいりあ  
女婿せえ要る死のと誇るもの筋を借財の債りふ分説術竭て銭欲との思  
ふより又縁談と誼する者あり抑這信夫の御西箇の豪家ありける西小居  
西岳氏と東原氏と因て土人彼等と稱て西の長者東の長者と喚  
做る其西岳某甲が妾を欲すると晚稻と媒妁する者あり真茶弁債る由  
ぞ術計盡る折れぬ敢又尋思不及先他と四見小遣しける小夏立  
か一議不及其意不任て晚稻と飽を粧飾せ初見参小遣しける小夏立  
地小教して俗の支度料をも金百兩と贈えける真茶弁則是を免れ



借財の債と僅小果と程小東長者の支を傳聞するや昔の今も兩  
 雄へ雙立る物あり西の負とと思ひけし俺其晩稻と妻小見とて  
 晩稻が衣裳調度の料金百五十兩と贈りか真茶并見より受納を諸方の借財の  
 尋くも還さず毎の飲食の友と集合て只酒醺遊樂の夜とて日小接する其  
 折々何夏の歌せ晩稻の舞踊を猶飽心地あり小程小東西の兩長者の媒妁  
 見等のみ管真茶并催促して又蟬く今愛と王家へもその愛と其懈りと責れとも  
 真茶并噪ぐ氣色も或の病着或月の障りありとて約束の日と延きと遺失うも  
 中され東西の媒妁見等初疑い後比皆謀られけりともち腹立て云合ふねと東西  
 齊一辛踏の宿所小来て憶ぐ鼗聲の高く其怠慢と責罵れとも真茶并阿  
 容る色もあつと冷笑して噫噪や汝等思ひ然天不測の風雨あり人小不測の疾  
 病の假令約束ありとも晩稻一向病着小打即ち争何は甘非除一年三箇

月支輝々小及ぶとも我等困窮ありと氣長く等ねとせも果ぶと虚言るに已終く  
 御高来る時今愛の背影と見え知りぬと詩も語も疾渡一絲と一箇が又又一  
 箇が喘多訛聲振立て咱等既小先約する小女見一人と東西へ研賣する古又や  
 あり并て済む里正許牽りてあて思ひ知りせん又蟬く立ねと曳立ると鳥詩技と突  
 けきその多と捉る東の媒人先約後約知らねとも咱等花主小西より支度料小  
 五十兩の増金あり西へ遣りて這方へ渡せ然る母と主人と中捕籠て挑争小慾  
 鬼の風波噪ぐ口舌の海は玉と林ぬ志渡の延聲戸取次小狂小程もあやを奥集  
 合し真茶并の酒肉の悪友洩して素破更あり共侶小敬鳥立る酒氣小乗と襖戸蹴  
 開吐也々々と跳び理不盡小件の両箇の媒人とも目鼻もつらと敷く小其吐差小  
 いて起んと蠢く肩腰小登蒐りと蹂躪れ小憐む小媒人等小頭顱小傷られ板面と  
 折きて血塗れ小平張る夏小騷劇小四下る里人等走來と或の両箇の疾負見を



勤助け或の意奪と推鎮め。支の顛末と諸問の程。不側杖打。酒客等。序次  
牙と思は。何の程の状退。て背門より出て。おけり。這時。少の意奪。忽地。酒の  
酔醒。後悔。され。及。わ。身。の。非。飾。と。陳。さ。る。言。果。へ。く。あ。ま。け。然。れ。ど  
而。箇。の。媒。始。旧。幸。不。疾。深。と。命。の。恙。る。た。の。う。支。私。に。信。を。示。す。あ。れ。お  
隨。即。支。の。顛。末。重。正。不。告。知。せ。領。主。の。廳。に。訴。け。り。公。程。不。當。圍。守。大。崎。左。少。將。の  
陣。代。を。信。夫。の。郡。司。元。信。件。の。訴。訟。と。し。て。雙。方。と。口。向。不。息。奪。陳。さ。る。と。し。た  
を。其。非。美。既。の。分。明。され。彼。身。に。林。獄。せ。ら。れ。け。り。公。后。又。元。信。の。西。山。東。原。の。面。長。者。と  
召。と。せ。て。支。の。虚。実。と。質。問。ふ。彼。等。も。亦。隱。と。し。辛。踏。息。奪。女。兒。晚。稻。と。毒。の  
支。の。西。山。百。金。東。山。百。五十。金。と。有。し。て。衣。裳。料。不。遣。不。息。奪。女。兒。と。重。買。し。て  
金。と。奪。ふ。女。兒。と。遊。興。さ。ま。支。延。引。の。及。ぶ。故。小。繫。一。く。催。促。さ。る。と。及。び  
媒。人。等。打。擲。の。卷。中。て。支。の。及。び。其。伎。倆。騙。兒。小。異。さ。る。と。已。と。し。た。意

断。仰。せ。る。事。と。と。東。西。同。病。同。憂。也。口。状。略。合。を。り。け。り。左。右。の。程。不。兩。面。の。媒  
均。兒。等。が。撲。傷。平。愈。さ。り。て。か。這。處。の。及。の。終。小。信。夫。の。郡。司。元。信。の。罪。人。辛。踏。息  
奪。と。獄。舎。より。牽。出。さ。せ。て。且。東。西。の。訴。訟。兒。等。と。信。夫。の。里。正。故。を。り。見。し。則。宣。示  
さ。り。て。西。山。生。辛。踏。息。奪。の。云。云。の。罪。れ。家。依。の。田。園。居。宅。等。皆。悉。く。没。官。せ。宅。眷。も  
俱。不。追。放。さ。る。者。又。西。山。東。原。甲。乙。等。の。各。齡。五。十。六。及。び。て。色。と。好。と。財。貨。を。擲。ち。て  
息。奪。の。謀。を。恥。と。思。ひ。寔。小。島。崎。の。白。徒。今。を。の。奪。得。を。戒。む。何。を。り。て  
後。で。後。に。え。る。故。不。賄。銅。各。五。十。貫。文。と。あ。る。後。に。信。と。慎。む。又。兩。面。の。媒。均。兒。等  
多。の。俱。利。の。為。の。人。の。首。見。と。媒。均。と。謀。れ。け。り。と。悟。り。と。又。蚊。く。訴。京。ま。然。る。を。せ。り。て  
闘。諍。不。及。不。疎。忽。の。至。り。鳥。崎。さ。る。這。回。且。省。免。さ。る。後。に。信。と。慎。む。又。兩。面。の。媒。均。兒。等  
重。不。控。り。有。任。り。程。不。阿。夏。等。の。屏。居。ら。れ。て。あ。ら。ぬ。公。の。目。良。人。息。奪。の。所。業。に。及。び  
没。官。せ。ら。れ。て。追。放。さ。る。と。夢。ろ。く。公。の。駭。死。且。患。ひ。て。支。の。迫。ら。ぬ。先。不。と。當。曉。情。地。の



腹心の人を頼む。衣裳調度は却て其價四五十金を納るべし。則て是は懐小  
 きて女見晚稻と共侶を行装と整て領主の沙汰を俟て。有徳而次の日里正故  
 老翁が来て領主の下知を傳へ及び阿夏の宅にも戸帳を比自里正も相渡しく晚  
 稻と俱しく立去て里正處を良人の俟程。是日辛踏息茶の背と二百鞭を腕  
 追放せられぬ計り。阿夏晚稻も逢とせぬ。然るに當晩近郊の白屋宿宿と  
 投りて台傷の瘡を俟む。任方孰處と定めぬ。京師の方心當ふ次の日より路次を急  
 ぐ。尚西岳東原の徒の先度の迭恨復えんと追蒐をせり。或もやと思ふ心の安らねど  
 人馬稀る。同道を走ると雨三日。是日都て山路。鳥路熊徑の幽る頃を歳梢の  
 孟るれば天寒くく雲雪と催。風暴来て梢離似す。宛屏風と建。窓如山又山と  
 登り申。親子三名背の汗も一歩二歩の艱難あり。百歩の百歩の苦患不堪。汗が  
 晚稻の咽喉の渴くとも。只管水と欲まれども。這頭へ人家遠く。茶店あるべし。

己と云ふ。虫陰の流る。石橋を見申。阿夏が準備の腰着碗小溢る。可ぬ。合  
 ちと卒も晚稻小飲まれ。晚稻の最吉一を飲といふ。半分に至る。忽地舌強の  
 面色変りて仆れんと。阿夏は是を驚いて晚稻と楚と抱り停め。叫びて良人の告知  
 れ。息茶も救馬に参り。先其脈を診て。約莫太山。嶂氣あり。又其水也。蛇  
 毒あり。意は晚稻の蛇毒あり。水と飲る中をあらひむ。と。四下と見え。其頭を老  
 たる。枝小最大に。蛇蛇之。横りてあり。か。阿夏は骨棘を。丈夫の言の違  
 ぬ。戸。一の。術と知ら。當下息茶。今。這蛇毒と解ん。虫良藥。藥  
 香小優者。又白柿。的中。俺信夫の宿所。鹿射香龍腦。這那と。使用  
 餘も。あ。ら。ん。這。逆。路。を。争。何。い。せ。ん。と。阿。夏。は。其。頭。を。脱。落。し。て。か。し。  
 往る。日。宿。所。と。立。去。る。も。錢。も。な。し。藥。種。と。比。白。の。囊。小。合。龍。で。腰。に。着。り。て。  
 末。鹿。射。香。も。な。し。と。む。や。と。の。又。蠅。の。囊。と。解。用。に。東。東。形。る。藥。盒。と。





く庵

晩縮甦生  
 去て二親蛇  
 蛻小駭く

冬枯れて  
 石炭  
 去てもの  
 山路かれ  
 琴鶴



おま娘

おんそ



會出く渡まを息其弁受合て奇妙々々と嘆賞多々。件の鹿射香と思ひの隨ふ  
 撮合て晚縮が古の袋回欲塗きらう猶も咽喉吹入れてうち守と在程の晚縮の  
 一聲呀と叫びて水と吐くと二三合忽地我れ復りて心地清爽ありといへ阿夏は  
 然こそ飲びて鹿射香の即效云と告ると息其弁推禁めて有徳る大山の蛇毒の  
 必豺狼も出づく山家の害怕多々を誘ふと急ぐて辛くく山を下りて  
 這宵の山脚の客店小天と明くを猶急ぐ去向へ都て驛路を二日あきりの旅  
 宿も多々既小京師の近ぐ程の有一日息其弁阿夏晚縮の譚ざり。這より京師へ  
 赴きて兼頭卿の憑票を恥と知らざる者小似ら知京師へ戰馬小買來て王室の卑  
 末より播紳達も衣食足らぬ西の都小兼易のも勘らむと云えり。馮一から  
 ぬ故主の身と寓せて人の胡慮あるらう近江の觀音寺へくそよかめれ。團守近江  
 判官佐々木高頼主武威迷團を威服して室町殿を補佐を今觀音寺

城下の敏昌京浪速に傳來り。晝表小俺京師在。時那藩中の人々相識れり。も  
 記あらし先や那里の赴きて便宜と微めて生涯の謀と做さる。飲と揮家の意のくぞ  
 やと向へ阿夏異議もる。然るべと応へ。息其弁隨即宅眷と將て觀音寺の城  
 下の赴て津回屋との客店の杖と駐め。相応へ借屋と求る。去歲の果敢るく  
 道路の暮て春正月の初旬ある。ぬむ津回屋の東隣の山口二天ある。借屋の庭  
 もの土蔵ある。借して二月上旬の移徙ある。その時无四郎の辛踏息其弁の吾足齋  
 天明と改め阿夏の老芋と呼易られて良人の医業と次員助る。是までの諸雜  
 費の晝表小阿夏陸奥を立去時。結轉け衣裳調度の價四五十金われ。斯てそ  
 息其弁の吾足齋の療治人並おられて觀音寺の城内の折々出入る程の晚縮が美  
 女るとぞ知りて病もる。少年輩の開き見ん為る。吾足齋許さる湯液とそふも  
 のけり。開か中お佐々木家の権臣る。三賀典膳政朝の家男志賀政賢と喚



做こころどしたる少まじか伎あありよも亦けん晩ね稻ねと眷あや恋こあり親めとをこめて取や妻まらま欲ちまを父ま政ま朝ま是まと  
先ま吾ま足ま齋まと相あ識まる者まより他まが素ま生まと因まる小ま吾ま足ま齋ま延ま明ま其ま事ま情まと  
益ま我ま遠ま祖まの在ま昔ま奥ま陸ま郡まの主まより安ま倍ま頼ま時まの氏ま族ま之ま金ま良ま  
數ま世まの後ま信ま夫ま郡まの移ま住まて遂まに醫ま生まの做まりよの國ま守ま大ま崎ま氏まの從ま事ま  
侍ま醫ま生まの買まふ元まられ後まに俺ま身まの至まりて父ま祖まの家ま業まと承ま継まる近ま曾ま明ま業ま  
詭ま言まと罪まを取ま罪まと為まりて己まと為まる身まの暇まとありて這ま地まの敏ま宗ま昌ま佐ま々ま木ま殿ま武ま  
徳まと景ま慕まる者まの故まに遠まく宅ま眷まと推まして這ま地まの僑ま居まありと寒まく居まる小ま説ま誇まれ  
其ま人ま兼ま飲まひて退まりて政ま朝ま父子まの告まる政ま朝まで介まりて先ま其ま親まと薦ま奉まる當ま家まの  
醫ま官まの做まりて後まに咱ま見まの娯ま談まあり及まびて夏まは遠まく成まかすといひけり吾ま足ま齋ま向ま夏まの光ま  
芋まの件まの首ま尾まと為まりて時ま至まりぬと教まぶ程まに這ま年の夏ま五ま月まの時ま候まより晚ま稻まが面ま部ま  
總ま身まの怪まし瘡まを多く取まりて其人まとも見えり花まの枝まの毛ま虫ま群まる月まの前まの雲まを

毛ま嬪ま西ま施まの嬋ま妍まも変まりて黒ま暗ま女まの做まりよ弥ま増ま晚ま稻まと見まる者ま唾まして他ま癩ま病まを  
さのせに必ま楊ま梅ま瘡まるる个まとを血ま彈まとせざるる。あはれ虫まく觀まる寺まの城ま内まのさるる  
賀まの政ま朝ま政ま賢まの俱まに教ま馬まに呆まれ果まて原ま来ま彼ま少ま女まの癩ま病まの肋まありけり猶ま知まらざる  
娶まりて必ま我家まと汚まれんといふと舌まと掉まひる色まも赤まも醒まて彼ま談まの止まりけり小ま程ま吾ま  
足ま齋ま光ま芋まの搖ま錢ま樹まと負まるる晚ま稻まが不ま慮まの悪ま瘡まの胆まと洗まら其ま目まる膏ま藥ま  
煎ま湯ま術まと盡ませよ。徑ま驗まありて思まひければ始まより言ま足ま齋まの匙まと駐まめて阿ま夏まの光ま芋まの蟬まく  
俺ま顧まふ這ま回ま晚ま稻まが病ま着まの癩ま病まを多く微ま毒まの中まに去ま成まの冬ま陸ま奥まより來まりて  
他ま蛇ま毒まの中まに命ま危まかりける小ま幸まの鹿ま射ま香まの功まあり志まの成まりか其ま餘ま毒ま猶ま  
腹ま内まの小ま在ま留まりて惡ま瘡まの做まれるる思まひければ始まより言ま足ま齋まの匙まと駐まめて阿ま夏まの光ま芋まの蟬まく  
今まに至まりて徑ま驗まあり。只ま這ま上まの白ま柿まと剪ま下ま用まるる小ま幸まの鹿ま射ま香まの功まあり志まの成まりか其ま餘ま毒ま猶ま  
小ま蛇まを飲まし者まありけり其ま蛇ま死まるる腹ま内まの小ま在ま留まりて惡ま瘡まの做まれるる思まひければ始まより言ま足ま齋まの匙まと駐まめて阿ま夏まの光ま芋まの蟬まく



末の命危ありし時、白柿を多く切きて煎じて五六并を用る程、其人酷く水滸と  
 蛇の肛門より降ると見る所、約一寸許の断離して首尾續く者ありと云ふ。是より補  
 茶を用ると一七日あて本復すと云ふ。當時人傳へて、疾白柿と求めるといふ  
 老柿の教養て猛可ふ人と云ひ、ある隣國美濃遣て大垣加納る所の白柿を  
 多く買合せて煎じて晩稻の飲する所、今日の及べども是も亦功あり、悪瘡跡  
 臭氣の堪ぬ。吾足齋疑感て、原来晩稻の悪瘡の蛇毒ありと云ふ。秋と思ひて之  
 今も施す。奇方と知らぬ夫婦、齊一且暮小神佛の祈る所、酷暑の堪ぬ六月の  
 時候人ありて五足齋の告る所。摂津國住吉の下、祢宜の家、無名の悪瘡の妙薬の  
 即效百發百中と云ふ。多岐の医師とそ対の某と、思ふくものも、今迄の爲め、おぼ  
 めのふと、といけり。吾足齋是と告て、其匙盡るまで、敢亦疑を、軀老柿の商量  
 まで、俺もくもえも、初装の慌しく、往還五六日の旅宿と云ふ。住吉の赴て、伴の祢宜の

宿野と向て、末意と告て、悪瘡の妙薬と求る所、王の祢宜合る所、いさゝかあり、これ  
 開の、錯ひるゝ我家之、然る悪瘡の妙薬と賣ふも、先祖より傳來ある奇效  
 薬方、是ありと、然れど秘まる所、約莫無名の悪瘡の百薬、経験する者、小栲神  
 一枚と、細末のて用れ、御貴の物に心する如く、立地、其瘡愈て痕、余わす、做れる、良  
 其藥種の、和殿、醫師、無礼、栲神の千歳の栲杞の根の化、七狗の  
 形、做れる物、是之京浪、速る某店と、海獵、あり、事、非如、あり、高料、ある、  
 百金、猶、廉、多、勉て、尋ね、あり、と言、可、寧、小、誨、れ、五、足、齋、の、思、ひ、小、似、も、若、く、望、  
 こと、失、ふ、の、ら、奇、方、と、告、ると、切、て、の、幸、る、の、け、り、と、思、ひ、入、ら、主人、の、謝、り、て、浪、速、  
 三、里、延、虫、崎、坂、の、勿、論、京、大、津、も、藥、店、の、限、り、漏、れ、を、限、り、適、遠、と、栲、神、の、  
 ると、尋、る、所、元、是、何、等、の、物、と、云、ふ、と、向、復、し、其、名、を、知、る、者、の、あ、り、と、云、ふ、五、足、  
 齋、困、果、て、只、得、宿、所、か、の、多、阿、夏、の、老、柿、晩、稻、も、小、支、云、と、告、知、ら、せ、り、老、柿、の



頼と病まの計の出る所と知らず。當下五目足齋又かき。俺堂はけるあり。這里よ  
 程遠くぬ一村。落杓杞村と喚做まある。其一村は皆杓杞也。其れも盡を弥生  
 生茂るこもなる。意ふ件の杓杞村の杓杞とて。莊客の是なりとま。これ今所  
 藏の者なりとも。三々の杓杞の根と穿ら。杓杞とて。これ今所  
 相識あると。箇様々計ひて。利誘つ我望と遂るとも。あらむ。老亭の  
 ろゆ心許る。空くと在る。左も右も計ひ。吾足齋再議及  
 紙と剪牌ふ為。杓杞と求る。趣は價百金。買と。幾枚抄写。尺  
 心利する者。央て持。杓杞村遣。則件の紙牌。村人の背。柱或は。前多。松栢の  
 幹と。貼せ。秋七月の時候。其後八月の中。院に至。思ひ。地。宿  
 六。汲引。杓杞と。晩稻の悪瘡。立地。瘡の。朱之。小再會の。飲ひ。盡した。  
 无四郎の五目足齋。阿夏の老亭。未麻。実事。地。今朱之。宿六。夫

婦の身の上云と。詳小説示ま。及び。心支の推隠。と。飾り人を。虐。己の  
 賢。如く。瞞。長談。脩話。朱之。宿六。の。果。俱。感嘆。を。日。は。  
 當下五目足齋。又かき。俺始。杓杞の價。金百兩と。定め。他人の物。と。買。と。念。ふ。  
 今幸。杓杞と。珠之。の。他。女弟。晩稻の悪瘡。便。是。一  
 家の。何。價と。論。況。弱。輩。の。金。持。無。益。の。使。果。及。  
 其身の害。小。然。俺。其。金。惜。む。珠。為。所。縁。と。求。相。心。支。の。  
 俺。百金。五。十。金。其。雜。費。と。先。先。這。と。宿六。阿夏の  
 老亭。舊縁の。毛。珠。幾。日。養。料。案。内。せ。其。教。し。一。時。時  
 報。と。せ。ま。老亭。小目。注。ま。老亭。早。く。身。納。戸。退。一。時。時  
 あり。金。分。紙。中。裏。と。て。未。け。五目足齋。受。合。備。あり。黒。漆。盆。其。恭。く  
 ち。載。是。と。宿六。薦。と。要。と。此。少。憶。骨。と。俺。教。の。折。乾



ろ。い。て。突。納。あ。れ。か。と。い。ま。て。居。る。宿。六。も。朱。之。以。立。願。と。壓。難。の。黙。然。い。る。思。ひ。と。又  
 へ。い。岩。根。松。の。集。る。鳥。の。宿。巢。の。あ。ら。宿。六。も。噫。思。ひ。さ。る。御。賜。と。い。ふ。御。心。さ。え  
 酒。の。酔。醒。て。肚。裏。の。思。ひ。を。拘。神。と。い。ふ。朱。之。以。の。賣。せ。其。價。の。一。割。十。兩。の。い。ふ。と。い  
 押。し。促。織。と。い。ふ。も。胸。等。般。要。の。玉。前。親。で。這。里。の。王。人。の。各。皆。朱。之。以。の。乾。父。回。し。て。唯  
 ち。と。何。夏。の。舊。識。の。と。熟。善。轉。し。小。甚。を。任。許。の。金。を。さ。と。飲。と。胸。の。恨。の。數  
 數。と。鎮。り。て。只。得。法。々。の。件。の。金。を。受。戴。て。さ。ら。ち。圖。一。の。ま。脚。心。使。の。預。り。ら。し。と。い  
 々。賦。懷。楚。と。挾。り。て。不。思。と。辭。之。か。る。去。ら。ま。し。這。時。既。の。日。の。暮。た。れ。五。日。足。齋。前。に。草。の。い  
 敢。又。強。く。留。り。さ。る。隨。不。思。と。納。り。て。送。の。辭。誼。口。誼。料。ら。さ。り。け。所。客。さ。る。不。用。意。の  
 去。て。然。る。も。の。款。待。も。せ。ぬ。靴。す。と。挑。燈。と。ま。あ。ら。ま。し。と。伯。六。は。東。主。否。那。里。の。心。を。さ。る。亦。同  
 廿。七。日。の。月。出。て。晝。の。如。く。明。く。不。挑。燈。と。何。の。せ。ん。珠。刀。祢。語。説。の。あ。又。は。眠。の。心。を。さ。る。亦。同  
 ね。娘。さ。る。造。作。の。さ。ら。ゆ。り。と。告。別。を。出。て。も。阿。夏。の。老。芋。と。朱。之。以。の。心。を。さ。る。亦。同

紙。燭。と。兼。て。共。侶。の。金。閉。を。送。り。は。是。より。と。未。朱。之。以。吾。足。齋。の。宿。所。の。歌。居  
 程。の。拘。神。の。價。百。金。と。の。邊。與。れ。さ。る。ゆ。り。怨。を。隱。く。色。も。生。ま。朝。の。音。足。齋。の  
 教。と。受。て。藥。の。調。合。の。預。り。夕。の。母。親。老。芋。と。資。け。て。薪。炊。の。事。の。代。り。萬。事。精。悍。の  
 舉。動。い。け。底。意。と。曉。ら。ぬ。吾。足。齋。阿。夏。の。老。芋。の。愛。飲。び。て。好。食。客。と。い。ふ。と。い  
 最。慮。し。思。ひ。け。小。程。の。五。日。足。齋。延。明。の。晝。表。の。賀。志。賀。の。嫌。談。の。緒。を。曳  
 きて。不。晚。稻。の。悪。瘡。の。故。を。と。て。その。の。を。さ。る。ゆ。り。遺。憾。く。思。ひ。病。架。の。為。招  
 れ。て。觀。音。寺。の。城。内。へ。赴。く。毎。人。の。對。して。説。誇。る。晚。稻。の。悪。瘡。平。愈。の。願。未。拘  
 神。の。即。功。云。と。其。精。妙。と。い。ふ。と。い。ふ。と。抽。女。晚。稻。が。病。着。の。原。是。蛇。毒。中。に。見。て  
 無。名。の。瘡。の。出来。の。徴。癩。の。あ。ら。ま。し。と。花。の。毛。虫。の。世。の。醜。女。の。薄。情。を  
 妬。ま。ら。り。ゆ。り。あ。ら。ま。し。と。云。云。と。言。御。さ。れ。一。雨。毒。時。也。兩。夜。の。月。の。毒。氣。の。時。の  
 了。今。と。そ。の。人。の。疑。い。の。さ。ら。ゆ。り。解。す。も。と。い。ふ。と。い。ふ。と。自。向。自。合。と。い。ふ。と。い。ふ。と。又。奇。を



好む社校の誦接だのほへての隈きやそくが言加賀志賀の政賢を父  
 政朝あつぐ如此あつぐと告て晩あけ縮ねと取とらまふと然しかれども政朝あつぐの計あ先あ吾足あ齋あ  
 對面あと屢あ問あ試あと事あの虚あ實あの彼あ人の心あ獨あも知あらるゝ急あと推あ禁あを  
 次あの目あ病あ病あ假あ托あて吾足あ齋あと招あけり吾足あ齋あの時あ未あけと心あ情あ地あの歎あて走  
 して言あ智あの宿あ所あの如あく主あ劑あと調あ進あをりし休あ藥あの後あも日あ毎あ政あ朝あと訪  
 するあるあ只あ願あの媚あ設あして陪あ堂あの如あくふあるありけり不あ題あ復あ説あ未あ朱あ之あの思あふあ  
 吾足あ齋あの宿あ所あ光あ陰あと過あと程あの晚あ縮あの容あ色あ世あの優あれあて言あふあと見ある  
 未あふ舊あ病あ發ありて己あの狂あふ猿あ馬あと鎮あめあるあ二あ親あの目あと云あの調あ戲あけ言あ  
 葉あと吐あちと長あ衣あと受あく毎あの晚あ縮あの酷あくうあ腹あ立あて其あの拂あ去あ物あと顔  
 根あやふ走あ退あく現ある處あの趣あさるあたの念あとああらめと思あひ悔ある未あ之あの懲あさあまふ  
 猶あも便あ宜あと規あ程あ有あ一日あ吾足あ齋あの朝あより出あていあまあかへらむ阿あ百あの共あ亭あ

頃津向屋の物贈りて鉄ひのえを背門より出たぬ朱之の折とゆ  
 中の間衣縫居る晚縮と大庭の掖捉て口説と晚縮の吐嗟と叫びて力涯の働小  
 其の貌と正しくてさう噫無慙や調戲も人小そらも一度さる二度さる根さ  
 多く見えぬ奴家の奴身の女弟さるを欲鳥許へと罵る間小朱之の身奴  
 起る冷笑してさういそは母鳥許る倦る母を骨肉を阿父耶の原是他人  
 況汝の螟蛉女也女弟のあを兄のあを非除縁の小敷糸を兄と呼れ妹と喚も  
 養嗣夫妻と云ふ世間同是あり今何ぞ禁忌と縁を短又汝の悪瘡百  
 薬驗るも一不拘神と贈れる俺さる汝の生さる蜘蛛小化を腐滅ふ死は汝  
 らん信れ俺の命の親も其大恩と思ふ最強面は甚麻ふを名と譲ると晚  
 縮のあを井のあをさる養嗣夫妻の二親の隨意を推辭ふ由を  
 護るを妹と伏の約束せん是不美又拘神と贈れを只利の為を奴



家と義共弟あり。と知られ故あつたれ。因思ゆは。むと只利の。と。り。せ。の。果。を。朱。之。  
 夕。の。晚。縮。を。信。と。疾。視。て。少。女。似。け。る。強。情。多。辯。俺。身。今。を。零。落。自。今。  
 業。平。と。世。の。謠。れ。思。ひ。を。被。し。少。女。子。の。背。見。せ。れ。例。の。事。意。不。成。も。賀。賀。政。  
 賢。の。姻。談。も。少。知。り。襟。の。附。中。の。あ。ら。せ。む。と。詰。る。を。せ。む。立。ま。る。を。せ。む。晚。縮。と。遣。り。  
 お。と。被。留。も。噂。や。と。を。ら。結。尺。の。打。と。拂。へ。女子。の。甲。斐。を。困。ど。せ。見。ぬ。折。ら。  
 足。然。と。と。庭。門。の。蹄。形。木。履。の。音。を。や。と。朱。之。之。の。母。親。の。か。の。け。り。と。見。入。り。  
 身。と。内。あ。り。と。玄。関。の。出。て。藥。と。切。り。も。當。下。晚。縮。の。乱。れ。る。髪。撥。揚。下。雨。後。の。  
 水。澄。ぬ。ら。ら。と。然。と。氣。を。母。と。迎。へ。小。土。瓶。を。茶。を。汲。取。て。薦。を。と。り。程。の。吾。  
 足。齋。の。笑。は。外。面。の。還。り。来。て。老。苦。の。納。戸。へ。招。け。り。と。半。晌。許。其。後。  
 中。の。間。の。立。止。ま。未。之。之。の。口。を。口。で。い。き。珠。よ。所。ね。好。喜。あり。俺。今。日。城。内。を。賀。賀。殿。へ。  
 参。り。お。政。朝。主。譚。ら。明。日。君。侯。馬。見。所。の。出。す。と。當。以。潘。郎。の。少。年。輩。共。

武。武。藝。の。勝。負。二。十。番。と。脚。見。の。笑。と。仰。ら。是。お。因。て。兵。頭。高。嶋。石。見。の。好。純。が。  
 請。宣。を。と。り。あり。其。所。以。の。好。純。の。宿。所。の。武。者。修。行。の。兩。少。年。還。留。と。あ。り。  
 在。の。共。ふ。武。藝。の。達。者。中。好。純。と。昔。縁。是。の。明。日。の。敷。手。劍。の。召。加。え。ら。  
 る。べ。う。も。や。と。口。管。願。い。宣。を。よ。り。君。侯。隨。即。御。許。容。あ。り。件。の。兩。少。年。の。少。年。を。と。  
 其。敷。加。え。ら。る。少。老。の。宿。所。の。乾。兒。未。朱。之。之。と。後。喚。做。と。社。校。の。還。留。  
 未。在。る。未。あ。ら。せ。年。の。幾。も。成。る。や。れ。武。藝。の。本。事。の。今。も。君。侯。の。御。許。  
 上。て。明。日。の。隊。の。召。入。れ。て。勿。論。衣。裳。武。器。を。と。志。賀。の。副。衣。を。貸。て。  
 向。の。合。せ。の。美。甚。麼。と。問。き。や。答。を。言。ふ。と。未。朱。之。之。の。造。化。の。事。を。明。  
 せ。松。郎。未。朱。之。之。の。今。茲。二。八。の。弱。輩。を。武。藝。の。人。並。を。い。え。然。る。を。明。  
 日。の。敷。手。劍。の。召。入。ら。せ。ひ。實。の。事。を。言。ふ。第。一。の。修。行。の。事。を。宜。く。願。ひ。  
 存。る。と。當。坐。の。応。お。政。朝。主。共。本。意。の。面。色。を。然。ら。明。日。未。明。より。



ころろとあけのすむ。和光其朱之从と俱しく俺宿野小末の之餘談い其折々々と頗りの小い。立の暇まうし退出て走りかへり来けえ思ひかけるは幸なれども只心許る。和郎が武藝いりるは俺其本事と知らされば胸安らざる所あり。朱之从のあき。忻然と含笑て腕と振りて谷るやう。身は其美の心易れ。俺身十二歳ふく福富の家小在り。時就鳥津凡作日高景市多と謀合し密に馬剣法槍法日打自得せむと云々。就中射藝六百發百中の段あり。あとのと裏の大和不在り。時一箭の拂々と射て仆く斧柄の必死を救ひて明且敵を討ちぬ。あれ何ぞの害怕い。威勢猛く説話れ。老芋もや。呆るは。教涯でる。當下吾足齋入い。俺僕見る珠。今茲二十歳を後二十一飲二ると。多賀王の實と告む十六歳ふく。い。其身少年之。武藝云拔萃る。守の賞感八ふ増て大禄と。御家臣。

今其月額と剃ざり。幸なれ今日結髪と。折額髪と剃殘しく元の大童不成るとも。優貌をれ相応しく。見て怪む者さう。疾鉄湯浴て来。身装多。一箇の不足あり。俺醫師の。珠の。若草隣家へ適一適て己の時可の袴。借りて来て。明の回。合。噫。開。と采利の。為。我。ら。單使る。現。小。人。の。時。の。貌。果。敢。る。富貴の宿。首。の。水。小。わ。ら。糸。も。只。是。僥。倖。と。被。て。願。ふ。開。が。中。の。晚。縮。の。軟。が。氣。色。の。納。戸。小。在。り。と。出。る。来。む。只。朱。之。从。無。礼。を。憎。と。の。と。吐。け。ける。是。より。下。の。衆。少。年。の。數。半。劍。の。段。を。積。數。を。涯。り。あ。れ。作。者。の。自由。ある。が。又。編。と。續。の。卷。を。改。め。後。板。の。鐫。著。主。蓋。前。文。未。既。云。彼。武。者。修。仍。の。兩。少。年。何。人。なる。看。官。早。く。猜。けん。も。あ。る。大。江。杜。四。郎。成。勝。峯。張。柴。六。郎。通。能。が。武。名。と。觀。音。城。内。の。揚。屋。夏。の。光。景。の。綉。像。と。茲。ふ。出。る。の。ら。猶。詳。ふ。知。ら。ず。欲。さ。亦。是。後。の。二。卷。編。次。る。を。俟。候。か。し。



通能勇を  
奮て暗賢  
を雌伏を



朱之公  
たるかこ

文  
言  
五

文  
言  
五



あ六郎  
みちう

文  
言  
五

文  
言  
五

文  
言  
五

文  
言  
五



○新編 玉石宮子訓 第二板代稿画工筆工目次

秀條 世里工 一陽齋後豊國

代稿 澤正次

淨書筆 井谷金川

新編 玉石宮子訓 第三板 上帙五冊 下帙五冊 當已の年内 閉板

開卷驚奇 俠客傳 第五集 上帙分卷五冊 下帙分卷五冊 近刻

○家傳神女湯 ゆめちの湯 一包包百編

○精製 應丸 大包代金糸 中包代金糸 小包代金糸 不仕仕

○熊止 黒丸 台のいけい 一包包各

○婦人 死虫の妙業 つゆあはれ 一包包各

製法 本家 四谷隠七 龍澤氏 弘野元齋 堀下南園 四方堂 店向 死沢氏 童子訓 猶更編 今も後年より作翁の

と末を續刻 澤澤のまをり 終ふ全編 成さるる必遠く 其を遠近賜顧の君子 先きの記を認め 春日秋夜の枕の伽り ありまんとを惟ねるゝの 書肆文溪堂敬白

# 繡像復讐山石見英雄録 全部 五十冊

南海 玉藻主人 編輯

浪花 一陽齋 後豊國 画

○初編 糸師人作 二編 玉藻主人 嗣著 三編 泉陽子 嗣著 第四輯 以下作者一家

詠録 天正の頃 浪流 赤名嶋の三勇士 岩見重太郎 橋樑 李が生さちより 武者修初

セー 川の武功 大蛇の害を 除き 老親の 妖を 鎮め 勇威を 振め 後子 天の 橋を 架す

廣瀬 成瀬 大川 市三人の 大敵を 撃て 父兄の 怨恨を 晴し 終小室町 腐小奉仕 仕仕

一 鈴木 至水 正 又 浪流 せれる とも 同い なる 聖華 真家 女 及 邪淫 婦 岩瀬 孝女 新月 小 子

鈴才 黨の 五雄 と 称する 之 方 之 列 傳 靈猿 惡魚 の 怪 談 亦 五輯 より 八益 入 佳境 新話 あり

南久寶寺 心齋 橋 小 入

浪花書肆 伊丹屋善兵衛 板



